

1 阿蘇くじゅう国立公園阿蘇地域とは

阿蘇くじゅう国立公園は、昭和9（1934）年に日本で最初の国立公園の1つとして指定され、平成26（2014）年には指定80周年を迎えました。阿蘇くじゅう国立公園阿蘇地域（以下「阿蘇地域」という。）は、世界最大級のカルデラ地形、現在も活動を続ける中岳を中心とした火山地形、我が国最大規模の面積を有する広大な草原景観、カルデラ床に広がる人と自然との共生による農村風景等を資源とし、特に人と自然の関わりによって築き上げられた二次的な自然が大きな特徴であるといえます。平成17（2005）年には、中心的な資源の1つである草原の持続的な保全の仕組みづくりに向けて、自然再生推進法に基づく「阿蘇草原再生協議会」が設立されています。

近年は、本公園内で世界水準を目指した多くの取組がなされています。平成28（2016）年度に開始した国立公園満喫プロジェクトでは、世界水準のDESTINATION（観光目的地）を目指し、インバウンド（訪日外国人）利用者数増加のための集中的な取組を行ってきました。また、世界農業遺産やユネスコ世界ジオパークの認定を受ける等、世界に誇るべき資産を有する地域であると評価されており、さらに、「草原－森林－集落－農地」の土地利用ユニット等を文化的景観と位置づけた世界文化遺産登録推進の動きが、熊本県や関係市町村を中心に進められています。

2 資源を取り巻く課題

数百年にわたる牛馬の放牧、採草及び野焼きによって維持されてきた草原景観や、地表に湧き出る湧水を活用した水田開発や稲作が形作った農村風景は、人々の生業があるからこそ維持されてきたものですが、近年は、農畜産業従事者の減少や生活様式の変化によって、その存続が危ぶまれています。さらに、これらの社会的背景や脱炭素化に向けた潮流の中で、再生可能エネルギー施設の設置が一部で行われていますが、場所や規模によっては阿蘇らしい景観を阻害することになりかねません。

また、阿蘇地域は、カルデラ地形という特殊な環境の中に生活空間があり、火山噴火、地震、豪雨災害等の自然災害と隣り合わせで生きなければならない宿命を持つ地域です。これらの自然災害は、新たな景観を形成する側面も有している一方で、公園利用、集落維持、景観維持等の脅威となり得る存在でもあります。

3 計画の趣旨

以上を踏まえると、阿蘇地域の景観資源を維持するためには、農畜産業従事者をはじめとする地域住民による活動が重要であるとの認識を強く持ち、地域の経済振興や住民の豊かな暮らしにつながるような住民が共感できるビジョンを掲げ、住民と行政が一体となった取組を進めていく必要があります。また、これまで住民が支えてきた景観資源の維持のための活動を、地域外の受益者にも支えてもらう仕組みづくりも進めていく必要があります。さらに、阿蘇らしい景観の維持のためには、自然公園法による規制だけでなく、自治体の条例や公共事業との連携も図っていく必要があります。

そこで、「世界に誇る自然環境と文化的景観の保全」、国立公園満喫プロジェクト等の推進に

よる「自然資源等を活かした地域経済の振興」、自然資源の持つ様々な公益的な機能等を上手く活用し、受益者を巻き込みながら地域社会が持続可能に発展する仕組みを構築する「自然資源を活かした持続可能な地域社会の形成」の3つの管理運営方針を軸とした阿蘇地域のビジョン「はぐくみ、つなぐ『阿蘇らしさ』～世界に誇れる国立公園へ～」を掲げます。また、このビジョン実現に向けて、地域住民、行政機関、関係団体、地域外の受益者等の参画による公園管理体制の強化を図ります。

今回、上記の国立公園ビジョンを関係者と共有するとともに、これまで以上に関係者と連携を図っていくため、阿蘇くじゅう国立公園阿蘇地域管理計画書（平成13年3月）を改め、管理運営計画書として策定します。

1 管理運営計画区の区分

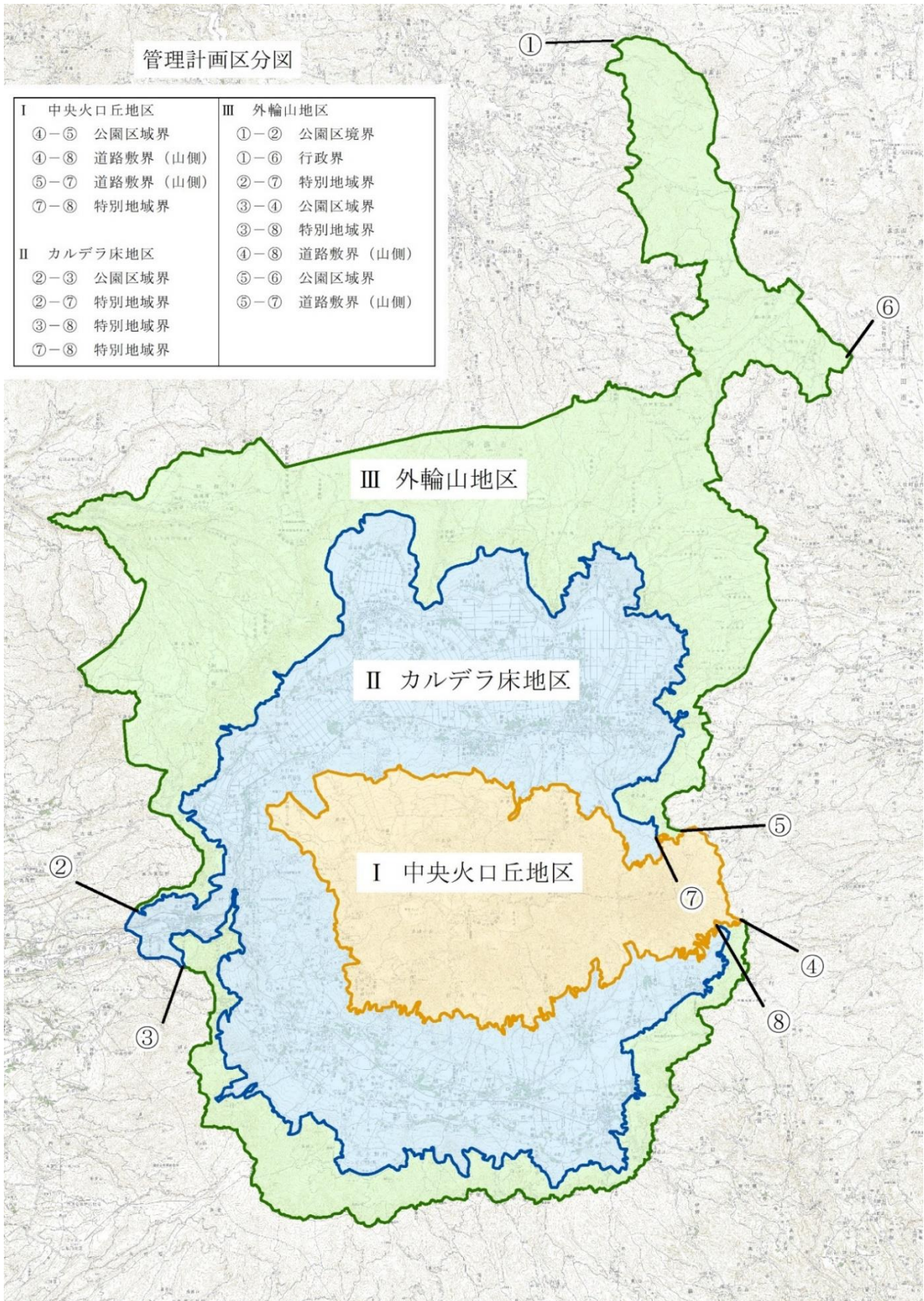
阿蘇地域は、地形的に中央火口丘、カルデラ床及び外輪山（カルデラ内壁、菊池溪谷、瀬の本高原、湧蓋山等を含む。）に大別でき、また、土地利用もこの分類で大まかに分かれ、公園管理の面でもこの地形区分毎に取り扱うべきものが多いことから、阿蘇地域を「Ⅰ 中央火口丘地区」、「Ⅱ カルデラ床地区」及び「Ⅲ 外輪山地区」の3つの地区に分け、それぞれに取扱いを定めます。

なお、地理学的にはカルデラ床から上部に向かって、カルデラ床、カルデラ内壁、外輪山縁（最高点）及び外輪新山と定義されますが、「Ⅱ カルデラ床地区」と「Ⅲ 外輪山地区」は、地理学的な定義によらず、特別地域と普通地域の境界を区分線としています。

カルデラ床地区については、これまでの管理計画書では火口原地区としていましたが、現在の一般的な通称を踏まえ、名称を改めます。

管理計画区分図

I 中央火口丘地区	III 外輪山地区
④-⑤ 公園区域界	①-② 公園区境界
④-⑧ 道路敷界 (山側)	①-⑥ 行政界
⑤-⑦ 道路敷界 (山側)	②-⑦ 特別地域界
⑦-⑧ 特別地域界	③-④ 公園区域界
	③-⑧ 特別地域界
II カルデラ床地区	④-⑧ 道路敷界 (山側)
②-③ 公園区域界	⑤-⑥ 公園区域界
②-⑦ 特別地域界	⑤-⑦ 道路敷界 (山側)
③-⑧ 特別地域界	
⑦-⑧ 特別地域界	



2 社会経済的背景

(1) 人口

菊池市、阿蘇市、大津町、南小国町、小国町、産山村、高森町及び南阿蘇村の合計人口は、133,880人（令和2（2020）年国勢調査）で、熊本県全体の7.7%です。各市町村の人口ビジョン等によると、人口増加が続く大津町を除き地域全体の人口は昭和30（1955）年以降減少し続けています。この減少傾向は、大津町を除いて続き、2040年には地域全体で推定値115,696人（日本の地域別将来推計人口（平成30（2018）年推計））となり、現在より1万人以上減少すると予想されています。

市町村別人口（令和2年国勢調査、単位：人）

市町村名	人口数		増減
	平成27年	令和2年	
菊池市	48,167	46,416	△ 1,751
阿蘇市	27,018	24,930	△ 2,088
大津町	33,452	35,187	1,735
南小国町	4,048	3,750	△ 298
小国町	7,187	6,590	△ 597
産山村	1,510	1,382	△ 128
高森町	6,325	5,789	△ 536
南阿蘇村	11,503	9,836	△ 1,667
合計	139,210	133,880	△ 5,330
（参考）熊本県	1,786,170	1,738,301	△ 47,869

(2) 産業別就業者数等

産業別就業者数の割合は、第一次産業（15.2%）、第二次産業（26.8%）、第三次産業（57.0%）で、熊本県全体の第一次産業（8.8%）、第二次産業（20.7%）、第三次産業（68.5%）に比べて第一次産業及び第二次産業の比率が高くなっています。第一次産業では、水稲、野菜、畜産（肉用牛）が主体ですが、林業も盛んな地域です。第二次産業は建設業や製造業が主体で、菊池市ではIT及びバイオ産業も盛んです。第三次産業では、観光地であることから宿泊・飲食産業が盛んで、関係市町村の域内総生産額6,248億円に対し、272億円が宿泊・飲食・サービス業と4.4%を占めています（令和元（2019）年度熊本県市町村民経済計算書）。高齢化の高まりを反映して医療・福祉施設の従事者も多くなってきています。

産業別就業者数（令和2年国勢調査、人口及び就業者計の単位：人）

市町村名	第1次産業		第2次産業		第3次産業		就業者計
	人口	割合	人口	割合	人口	割合	
菊池市	3,701	16.0%	6,487	28.2%	12,656	54.9%	23,032
阿蘇市	2,368	18.6%	2,842	22.4%	7,373	58.0%	12,715
大津町	1,232	7.0%	6,232	35.3%	9,920	56.2%	17,655
南小国町	413	18.9%	289	13.2%	1,473	67.5%	2,182
小国町	564	16.0%	590	16.7%	2,361	66.9%	3,527
産山村	336	41.5%	112	13.9%	361	44.6%	809
高森町	631	21.4%	591	20.1%	1,711	58.1%	2,944
南阿蘇村	1,056	21.0%	1,075	21.4%	2,872	57.2%	5,019
合計	10,301	15.2%	18,218	26.8%	38,727	57.0%	67,883
(参考) 熊本県	71,768	8.8%	169,965	20.7%	560,851	68.5%	819,259

※分類不能の産業があるため、各産業の就業者数の合計は就業者数計と一致しない場合がある

域内総生産（令和元年（2019）度熊本縣市町村民経済計算書、生産額の単位：億円）

市町村名	第1次産業		第2次産業		第3次産業		生産額計
	生産額	割合	生産額	割合	生産額	割合	
菊池市	173	7.8%	986	44.2%	1,058	47.4%	2,230
阿蘇市	78	6.7%	441	37.8%	640	54.9%	1,166
大津町	39	2.2%	828	47.4%	869	49.8%	1,746
南小国町	9	7.1%	18	14.2%	100	78.7%	127
小国町	12	5.6%	29	13.6%	170	79.8%	213
産山村	9	17.3%	18	34.6%	25	48.1%	52
高森町	24	10.9%	54	24.7%	141	64.4%	219
南阿蘇村	21	4.2%	226	45.7%	245	49.5%	495
合計	365	5.8%	2,600	41.6%	3,248	52.0%	6,248
(参考) 熊本県	1,877	2.9%	16,216	25.5%	45,156	71.0%	63,634

※分類不能の産業があるため、各産業の生産額の合計は生産額計と一致しない場合がある

3 自然景観の概要

(1) 中央火口丘地区

本地区は、阿蘇カルデラ内で景観上及び利用上の核心をなす部分です。標高 1,592m で阿蘇山の最高峰である高岳、活発な活動を続けているにも関わらず近接して火口を望見できる中岳、岩峰が連なり奇観を呈する根子岳、北麓に草千里を擁する烏帽子岳及び西側に多くの浸食痕のついた杵島岳の5つから阿蘇五岳が構成されています。

中岳火口周辺にはイタドリ、コイワカンスゲ等で形成される火山荒原が広がり、それを取り巻くようにミヤマキリシマの群落が形成されています。杵島岳及び烏帽子岳周辺は、草千里に代表される草原となっています。草原は、様々な生き物が生育、生息できる環境を育んでおり、阿蘇地域の草原に生育する植物は約 600 種といわれています。その中には、九州が大陸と陸続きであったことを物語るヒゴタイ、ハナシノブ、マツモトセンノウ（ツクシマツモト）等の阿蘇地域だけで見ることができる希少な植物も生育しています。令和2年度には、絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律に基づく国内希少野生動植物種としてハナシノブの他に4種（タマボウキ、ハナカズラ、アソサイシン及びヒナヒゴタイ）が追加指定されました。また、多様な植物が多様な昆虫や野鳥の生息できる環境を育んでいます。特に阿蘇地域は昆虫類の宝庫であり、熊本県産のチョウ類約 120 種のうち 109 種が阿蘇地域に生息しており、「阿蘇はチョウの楽園」ともいわれています。なお、火山荒原と草原の間には森林が広がっており、それらの植生と一体的な景観を形成しています。

(2) カルデラ床地区

本地区は、阿蘇カルデラの底にあたる部分で、集落地及び農地となっており、約5万人の人々の生活の場です。カルデラ床の北側を阿蘇谷、また、南側を南郷谷と呼び、古くから人々が生活を営んできた場所であり、良好な農村風景が残されています。昭和9年の国立公園指定以来、本地区のほぼ全域は、制限緩和地区（現在の普通地域）として取り扱われてきましたが、カルデラ景観を構成する重要な地区です。集落地の上部には、森林及び草原が広がり、「草原－森林－集落－農地」という土地利用ユニットは、世界文化遺産登録を推進する上において、文化的景観として位置づけられています。

(3) 外輪山地区

本地区は、涌蓋山、瀬の本高原、菊池溪谷、端辺原野及び波野原を含む北外輪山と南外輪山からなり、カルデラ地形を特徴づけている景観的に重要な地域です。

阿蘇地域の外輪山は、標高 800m から 1,000m で連なり、外側はなだらかな裾野、内側は急峻なカルデラ内壁となっています。また、北外輪山から瀬の本高原にかけては広大な草原景観が続きます。

北向山、菊池溪谷及び南外輪山等の一部には原生状態に近い自然林が残っており、全般的に開発の進んだ阿蘇地方において、原生植生を探る上で貴重な存在となっています。

また、特別天然記念物のカモシカについては、熊本県全体では生息域におけるニホンジカの採食等の影響による下層植生の衰退を主要因とする餌不足のため絶滅の危険度が増しているのに対して、高森町下切地区から南阿蘇村の南外輪山に至る地域では平成23（2011）年以降比較

的多くの目撃や滅失（死亡）の情報が得られており、新しい生息域として認識すべき段階であるとされています（大分・熊本・宮崎県教育委員会：平成 30 年・令和元年度九州地方カモンカ特別調査報告書）。これらの状況から、令和 4（2022）年 2 月には、熊本県の野生動植物の多様性の保全に関する条例に基づく指定希少野生動植物に指定され、特に絶滅のおそれがあるために保護を図る必要がある種であると位置づけられています。

4 公園利用の概要

（1）現況

本公園の利用の特色は、道路網が発達しており、自動車による利用が多いことで、中でも阿蘇と別府を結ぶ九州横断道路は、阿蘇とくじゅうにまたがる広域的な景観探勝を楽しむ公園道路として本公園利用の基幹となっています。

中央火口丘地区では、現在も活動を続ける中岳の火口探勝及び草千里ヶ浜でのトレッキングやハイキングに多くの利用者が訪れ、近年阿蘇山上地区で年間約 40 万人（阿蘇山上公園年間利用者数より）の利用があります。中央火口丘山麓及び外輪山上一帯に広がる草原では、ハイキング、キャンプ等の野外レクリエーション利用が盛んであり、近年は、乗馬、サイクリング、パラグライダー等の多様な自然体験を楽しむことができます。

カルデラ床地区では、農村風景をフットパスコース散策やサイクリングでも楽しむことができる他、温泉、食、伝統文化等に触れ合えることも大きな特徴です。

また、利用拠点として南阿蘇、地獄垂玉及び瀬の本に集団施設地区が設定されているとともに、南阿蘇集団施設地区内にある南阿蘇ビジターセンター、阿蘇山上地区では阿蘇山上ビジターセンター、菊池溪谷では菊池溪谷ビジターセンターが、それぞれ情報発信拠点として設置されています。また、内牧地区には草原保全活動の拠点として阿蘇草原保全活動センターが設置されています。

（2）利用者数

本公園全体の利用者数は、平成 27（2015）年以前は年間約 2,000 万人を数えていましたが、平成 28（2016）年 4 月に発生した熊本地震や、同年 10 月に発生した阿蘇中岳の爆発的噴火の大きな影響を受け、約 1,300 万人まで減少しました。その後、懸命な復旧復興とインバウンド対策等によって、平成 30（2018）年には約 1,700 万人に回復しましたが、令和 2（2020）年から世界中に広がった新型コロナウイルス感染症の影響により、利用者数の先行きが不透明な状況です。

また、インバウンド数は、平成 27 年の約 68 万人から、平成 30 年には 100 万人超と着実に増加していましたが、平成 30 年下半期の外交関係の悪化や、令和 2 年からのコロナ禍によって急激に減少し、本公園においてもそれらの影響が顕著に現れています。

本公園を訪れている外国人の国籍別内訳を見ると、アジア圏からの来訪者が 95%以上を占めています。その中でも、韓国が 60%以上、台湾が 20%程度、香港が 10%弱、中国が 5%程度、タイが 2%程度と続いており、全国の国立公園平均と比べ、欧米豪及び中国からの来訪者割合が低いことが、本公園の傾向として見られます。

国立公園満喫プロジェクトで策定された「阿蘇くじゅう国立公園ステップアッププログラム

(以下「SUP」という。)2025」では、訪日外国人来訪者数の目標を、SUP2020と同じ140万人としています。また、公園利用者数の目標は、ワーケーションをはじめとする新たな公園利用が推進されること等を踏まえ、熊本地震以前で最も公園利用者数が多かった平成20(2008)年頃の2,300万人を数値目標としています。

(3) 利用の質

本公園利用者のリピーター率については、国立公園満喫プロジェクト先行8公園(以下「8公園」という。)平均と比較すると、日本人は同程度ですが、外国人は令和元(2019)年において低くなっています。一方で、令和元年の外国人満足度においては、8公園平均と同程度であり、来訪者への観光サービスの提供については、平均的な水準は満たしており、今後はインバウンドも何度でも来訪したくなる地域となるための対策を検討する必要があります。

また、観光消費合計額については、8公園平均と比較すると、外国人は4万円から9万円までの範囲を変動し、その傾向を捉えられませんが、日本人は1万5千円程度であり、8公園平均を下回っています。今後、費目別消費額を分析し、観光客が求める本公園ならではの消費ニーズを把握するとともに、潜在的な資源についての魅力の掘り起こしと磨き上げを検討する必要があります。

併せて、今後の国立公園満喫プロジェクトにおいては、こうした利用者数だけでなく、消費単価や体験の質の高さや深さを掛け合わせた「体積」を大きくすることも重要であるため、「リピーター数」、「満足度」及び「公園内の支出額」が目標指標として設定されています。

(4) 阿蘇くじゅう国立公園のコンセプト

国立公園満喫プロジェクトでは、「世界水準のdestination」になることを目指していますが、そのためには本公園を代表する自然景観である草原及び火山はもとより、この地域の気候や地形に大きく影響し、人の暮らしの恵みにもなっている風(風土)や水(温泉)、熊本地震等の災害からの復興、草原維持等でのたくさんの人の関わり合い等が欠かせません。

主に利用促進の観点から、この優れた景観要素と人文要素が織りなす本公園特有の風致景観を示すものとして次のとおりコンセプトが設定されています。

『草原のかほり、火山の呼吸。風と水の恵みを人が継ぎ人が繋ぐ、感動の大地』

《国立公園公園利用者の2回目以上のリピーター率の推移》

(環境省国立公園満喫プロジェクト推進業務報告書より)

	年 (西暦)	平成27 (2015)	平成28 (2016)	平成29 (2017)	平成30 (2018)	令和元 (2019)
外国人 (%)	阿蘇くじゅう国立公園	集計なし	集計なし	17.9	12.3	8.4
	満喫プロジェクト 8公園平均	集計なし	集計なし	16.1	13.5	14.0
日本人 (%)	阿蘇くじゅう国立公園	集計なし	集計なし	79.7	68.6	56.0
	満喫プロジェクト 8公園平均	集計なし	集計なし	71.4	59.8	56.8

《阿蘇くじゅう国立公園公園利用者の滞在全体の満足度[※]の推移》

※7段階の選択回答のうち「大変満足」割合

(環境省国立公園満喫プロジェクト推進業務報告書より)

	年 (西暦)	平成27 (2015)	平成28 (2016)	平成29 (2017)	平成30 (2018)	令和元 (2019)
外国人 (%)	阿蘇くじゅう国立公園	集計なし	集計なし	31.8	40.1	44.6
	満喫プロジェクト 8公園平均	集計なし	集計なし	38.1	47.0	44.8
日本人 (%)	阿蘇くじゅう国立公園	集計なし	集計なし	38.1	49.5	34.8
	満喫プロジェクト 8公園平均	集計なし	集計なし	37.5	46.9	35.2

《阿蘇くじゅう国立公園公園利用者の観光消費合計額の推移》

(環境省国立公園満喫プロジェクト推進業務報告書より)

	年 (西暦)	平成27 (2015)	平成28 (2016)	平成29 (2017)	平成30 (2018)	令和元 (2019)
外国人 (円)	阿蘇くじゅう国立公園	集計なし	集計なし	91,659	66,376	42,409
	満喫プロジェクト 8公園平均	集計なし	集計なし	65,851	64,863	65,046
日本人 (円)	阿蘇くじゅう国立公園	集計なし	集計なし	17,727	17,105	12,195
	満喫プロジェクト 8公園平均	集計なし	集計なし	33,662	29,708	27,866